

三輪明神窯史跡園見学と三田青磁の作陶体験&三田ぶらり歴史めぐり

実施日 2019年2月1日（金）

集合場所・時間 JR 三田駅前 南側広場 集合時間 10時00分

挨拶 代表又は企画専任幹事

行程と時間 (A 班) JR 三田駅 10:05～三輪明神窯史跡園 10:20～三田青磁の作陶体験と園内見学～11:50～昼食～12:30
三輪明神窯史跡園 12:30～JR 三田駅 12:45～神田惣兵衛・旧住宅～旧九鬼家住宅史料館～三田城跡（三田陣屋跡）
～白洲退蔵出生地～心月院～JR 三田駅 15:15頃解散
(B 班) JR 三田駅 10:05～神田惣兵衛・旧住宅～旧九鬼家住宅史料館～三田城跡（三田陣屋跡）～白洲退蔵出生地～心月院
～JR 三田駅 12:35～三輪明神窯史跡園 12:50～昼食～13:30
～三田青磁の作陶体験と園内見学～15:00三輪明神窯史跡園 15:00～JR 三田駅 15:15頃解散
1日の行程が終了した班から、班ごとに解散してください。三輪明神窯史跡園・旧九鬼家住宅史料館退出時にはスタッフにお礼を言ってください。
A班・・・3班・4班 B班・・・1班・2班

参加費用 500円（三田青磁作陶費用） 送料などは科から補填

中止条件 前日17時のNHKの天気予報で兵庫南部の降水確率が午前・午後いずれかが50%以上の場合中止。
三田地方に気象警報が出た場合即閉園となる。

製品引き渡し時期 2019年4月（来年退会される方は、残られる方のどなたかに引き取りをお願いしておいてください）

当日の持ち物など 弁当・飲み物・雨具・平坦な道ですが少し歩きます必要な方はストック・歩きやすい服装・他・健康保険証など

注意 三田ぶらり歴史巡りは企画担当が案内、説明をします。
三輪明神窯史跡園・旧九鬼家住宅史料館にはスタッフの方が1名以上います。いろいろ質問していただいて結構です。

三輪明神窯史跡園見学と三田青磁作陶体験&三田ぶらり歴史めぐり 関連資料

三輪神社

【社頭掲示】 当神社はわが国最古といわれる大和国一宮・大神神社から分祀された社であります。御祭神の大己貴神は、大国主神の幸魂（人に幸福を与える神の霊魂）、奇魂（不可思議な力を持つ神霊）で、いつも私たちの日常生活が楽しく豊かになるようにお守りになっている大神であります。

社歴を顧みますと、『新抄格勅符抄』等に「天平神護元年（765）九月、摂津国に大和の大神神社の封戸二十五戸を置き、後に五戸を追加した」とあり、既に八世紀の中頃には「三輪神社」が存していたようで、三田市内で一番歴史のある神社に数えられています。

その後、南北朝時代の文和年間（1352～56）に大和国城上郡から来た領主・松山弾正が天神山からこの地・丸山に遷座し、社殿を設け、奉祀したと伝えられています。

近世になると三田藩主の崇敬も篤く、二代藩主・九鬼隆昌が神鏡一面、五代藩主・隆方も元禄十四年（1701）に「三輪大明神縁起」一卷を奉納しているほか、歴代藩主も拝殿の再建、石鳥居、額面、神輿などを寄進しています。

最近では、平成七年の阪神大震災で大鳥居、石燈籠など石造物に大きな被害を受けましたが、氏子たちの浄財で半年後には再建されています。なお、同九年には例祭に奉納される「波宇也踊」（はうや）が市の無形民俗文化財に指定されました。

三輪明神窯史跡園

三輪明神窯史跡は、江戸時代の後期（1799年）から昭和10年代頃まで操業していました。

作られていた器は、青磁をはじめとして染付、色絵、白磁などの製品です。とりわけ「三田青磁」に多くのすぐれた作品が生み出されました。

もっとも盛んに焼き物を作っていた当時は、広く全国的に流通し、その美術的価値も高く評価されました。

・第3号窯跡と素焼き窯

江戸時代後期に最も盛んに焼かれた3号窯跡は、遺構の後部は埋め戻され全容を見ることは出来ませんが、斜面を利用した連房式登り窯で焼成室は14以上あったと推定されています。中央部分の円い窪みは素焼き窯で全長4.8m江戸時代末以降使用されました。

・第1号窯跡

明治から昭和にかけて使用され、焚口から焼成室4室、煙だしまでよい状態で保存されています。

三田焼

江戸時代に三田市の志手原、三輪、虫尾で作られた焼き物を三田焼と言います。

三田焼の始まりは「寛政年代摂津有馬郡志手原、土焼始まる」との記録がありますが、それよりも古いといわれています。

三輪明神窯の始まりは、三田で青磁の釉薬になる石が取れることを、陶工内田忠兵衛がつきとめ、青磁など磁器生産をするために豪商神田惣兵衛（三田市内に旧住宅がある・米を扱っていたようです）に支援を申し入れました。その後、京焼の陶工欽古堂亀祐らを招いて、盛んに生産をおこないました。当時は各地の窯の名工たちとの交流もあり、多くの名品を生産しました。

焼き物の種類は青磁、染付、色絵などです。器の種類は花生、香炉、植木鉢などです。中でも特徴的なものは直径10cm前後の青磁小皿です。形も三角形、四角形、輪花形など様々な形があります。

青磁小皿など小皿は土型を用いて作ります。型づくりは同じ厚さの粘土板を作り、土型にかぶせ、指で押さえ

て形や文様を写し取ります。この技法で複雑な形や文様の皿などを量産することができます。土型や生産技法を欽古堂亀祐が指導しました。

三田焼の生産は一度おわりますが、明治以降に三田青磁会社として新たに運営をはじめ、焼き物の輸出もしました。また国内勸業博覧会に出展し有功賞等を受け、三田焼が全国に広がりました。その後、主要な窯主たちが亡くなり、昭和10年代には生産が終わりました。現在三田焼の一部は三田市で収蔵、展示活用しています。また、当時の三田焼に触れることができるように、県指定史跡である三輪明神史跡園として整備し、窯跡の見学や当時の陶工になった気持ちで、焼き物体験をすることができます。



三輪明神窯



色絵



三田青磁

三田ぶらり歴史めぐり 関連資料

三田市

三田市は、兵庫県の南東部に位置し、神戸市の市街地より六甲山系を越えて北へ約25km、大阪市より北西へ約35kmの圏域にあります。

北は篠山市、東は宝塚市、猪名川町、南は神戸市、西は加東市、三木市に接しています。

豊かな環境と穏やかな気候に恵まれたこの地に人々が暮らし始めた歴史は、はるか数万年前の旧石器時代にまでさかのぼります。

奈良時代には現在の屋敷町周辺に、のちの金心寺につながる寺院が建立され、門前には「まち」も形成されたと伝えられています。

また南北朝時代の記録には「三田城」の名称がみえ、このころまでには「三田」の地名や拠点となる城郭がこの地に成立していたと考えられています。

戦国時代以降の三田は、城郭を拠点とする政治都市としてのみならず、周辺の豊かな農村地域から供給される米や材木などの集散地として、流通・経済の中心としても発展してきました。江戸時代には三田藩九鬼氏および麻田藩青木氏の支配となり、三田の町は三田藩3万6千石の拠点として大いに繁栄します。

さらに明治以降は郡役所の設置や鉄道の開通などにより、当時の有馬郡の中心地としてより一層の発展を上げています。

その後、昭和31年に藍村と本庄村が合併して相野町が成立、次いで、三田町、三輪町、広野村、小野村、高平村が合併して三田町が成立し、さらに昭和32年に三田町が相野町を編入したのち、昭和33年7月に市制を施行し現在に至っています

九鬼一族

九鬼氏といえばやはり歴史好きは戦国大名にして日本でも有数の海賊にして水軍である、その紀州志摩の九鬼氏を思いおこすのではないだろうか。水軍の九鬼は、九木崎のある現在の三重県尾鷲市九鬼町の出であり、元は隣の熊野の海賊で、熊野大社の別当（神官）の一族であるらしい。

九鬼氏は戦国時代となると九鬼澄隆の子、嘉隆が伊勢国の国司北畠氏へ仕え、周囲の土豪を吸収して勢力をのばすが、海賊内のいさかいに破れ逃走。滝川一益の仲介で当時近畿地方に覇を唱えていた織田信長を頼り、その配下となる。（本当は定隆の次男。澄隆は嘉隆の兄の子、つまり甥にあたる。甥の子というのは、本家を継いでい

るという意味で系図をそのようにしているらしい。ちなみに澄隆は嘉隆に殺されている。）

信長はまた強力な水軍を手にし、覇権を瀬戸内にまで延ばすこととなる。

信長の石山本願寺攻めの際には、かの毛利水軍（村上水軍）を破り、大阪湾を封鎖して信長を勝利に導き、その功により伊勢志摩鳥羽城 3 万 5 千石の大名となった。

信長の死後は秀吉へ仕え、朝鮮出兵の際には巨大船「日本丸」を旗艦に 60 隻の船団総督を務めたが、朝鮮水軍総督・李舜臣の亀甲船団に負けてしまう。

そもそも李舜臣は半島沿岸の水流をよく読み、地理に不慣れな日本の船団を岩礁地帯へ引き込んで、鉄張りの亀甲船で突撃し、勝つという戦法が得意だったらしく、嘉隆はその作戦にひっかからぬよう、うかつに李の戦法にはのらず、船同士を錨でつないで港を封鎖し、動かなかったが、それが陸軍の加藤清正や福島正則には、「戦いもせんで港に凝（ジッ）としている腰抜けが.....」と映ったらしく、秀吉が没して軍勢を日本へ引き上げた後は、その事を糾弾もされたらしい。

秀吉の没後は、息子・守隆が家康（東軍）へつき、嘉隆は守孝の弟らと共に石田三成（西軍）へついて、親子で関が原を戦った。これはもちろん、どちらが勝っても九鬼家は残るという、非情なまでの戦略によっている。真田家も同じことをしている。

関が原の後、守隆は 2 万 5 千石を加増され、嘉隆は謹慎していたが、守隆の助命が受け入れられ、助かるはずだったが、どうせ助からぬなら潔くという家臣の進言により嘉隆は助命の報が入る寸前に自害してしまった。

大坂冬の陣においても守隆は熊野水軍を率いて大坂湾を封鎖し、さらに（ちょぺっとだが。）石高を加増されている。

その後、家光の時代、守隆の 3 男・隆季（たかすえ）と 5 男・久隆（ひさたか）に家督争いが生じ、幕府の調停でそれぞれ隆季は丹波綾部 2 万石、久隆は摂津三田 3 万 6 千石へ転封となり、戦国大名・九鬼は以後二度と水軍を率いる事はなかった。

また明治時代には両家は共に子爵となっている。

摂津三田藩に転封となった後は別表系譜の青色枠のように

初代九鬼久隆から隆昌・隆律・副隆・隆久・隆抵・隆張・隆国・隆徳・精隆・13 代隆義と明治維新まで 13 代続いた。

・陶祖・神田惣兵衛旧住宅

三田で青磁の釉薬になる石が採れることを、陶工内田忠兵衛が突き止め、青磁など磁器生産をするため豪商（コメの商いをしていた）神田惣兵衛に支援を申し入れました。磁器生産の支援をした神田惣兵衛の旧住宅その一部が残っている。



・旧九鬼家住宅史料館

三田藩の家老職を代々つとめた九鬼家の当主九鬼隆範が、明治初期（明治 8 年前後）に建てた全国でも数少ない擬洋風建築の建物で、兵庫県重要有形文化財に指定されています。

擬洋風建築とは、明治維新後の純洋風の建築物を大工が似せて建てた建築物です。

旧九鬼家は伝統的な商家のたたずまいと洋風のつくりが一体となったところが見どころで、一見すると三田にのこる商家のたたずまいと同じですが、正面から向かって左手の2階のベランダ部分と窓が洋風の作りとなっています。

内部も、畳敷きの伝統的なつくりのなかに2階部分に、いろいろな帳簿や書き付け、古い和本などのページを下貼りにして、襖紙を壁紙にして天井から壁全体に貼りつめた洋間があります。

館内には、九鬼隆範氏手作りの製図用具や定規、設計図用の絵の具や絵皿などの小物が展示されています。

また、鉄道技師であった隆範が蓄積した鉄道関係図面やその他の関連資料等、歴史的にも極めて貴重な資料も見つかりました。

建物の特徴

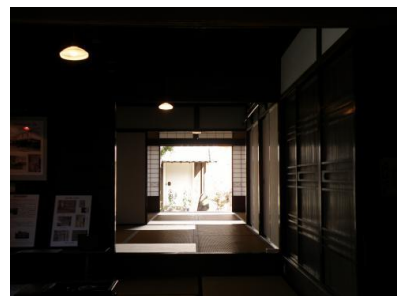
主屋は、1階は板張りと漆喰で壁を仕上げ、格子戸、障子戸、板戸を使用した和風の作りになっています。そして、2階の壁は漆喰で窓は鎧戸となっています。東半分はベランダとなっており、円柱や柱間は漆喰で塗りこめられています。また、柱稜をアーチ状に仕上げたり、くり形つきの手摺を設けるなど、洋風の趣に造られています。2階東半分は洋間となっていますが、床に畳を敷いたり、壁や天井は壁紙の代わりに日本的な襖紙を張るなど、洋風の技法を取り入れつつ、日本建築の技法が生かされています。



表から見た旧九鬼家



ベランダ



一階室内



2階室内



九鬼隆範が描いた図面等

・旧九鬼家住宅の設計者 九鬼隆範

天保6年(1835年)に三田屋敷町に生まれました。明治3年(1870年)に三田藩の家老九鬼伊織隆継の長女と結婚し養子となります。

砲術、築城術、測量術などを学び、明治維新後は技術者として鉄道設計などに携わり、日本の鉄道開発に貢献しました。

・隆範の知識は誰から得てどんな仕事をしたか。

隆範は幕末に神戸で活躍した勝海舟に測量技術などを学び、1872年、国内初の新橋—横浜間の鉄道工事に携わった。

また隆範御直筆の「京神間鉄道線図」がある。

1877年、京都—神戸間が開業した際に天皇陛下に披露した図面の控えが市の指定文化財になっている。

勝海舟は海軍操練所を神戸に造ったり、神戸海軍塾(勝塾)が設けられたりしている、隆範が教えを乞うたのはそのころのことといわれている。

・三田城跡(三田陣屋跡)

先祖代々志摩を本拠にしていた九鬼水軍が海から遠く離れた山中に移され、築城したのが三田陣屋です。

規模が小さいので陣屋と呼ばれていますが、丘の上に築かれた、れっきとした城です。資金的な問題から陣屋として築いたといわれている。

三田陣屋の跡は、本丸が三田小学校になっており、ここに三田城址の石碑と縄張り図のある案内板があります。

二の丸が県立有馬高校の敷地になっており、本丸と二の丸の水濠、二の丸東側の空堀が残っています。

建物の遺構としては、小学校から西に徒歩 10 分の所にある金心寺に下屋敷表黒門が移築されています。



三田小学校本丸跡に建つ城跡碑



金心寺に移築された下屋敷表黒門

三田藩は；陸に上がった河童；のように山間部の小藩になったのちも、九鬼水軍の昔を忘れないように、堀に代用した大池に船を浮かべて水戦の訓練を怠らなかったといわれる。



お城の地図



内堀（一部には水が・・・）



本丸と二の丸の間にあった内堀（空堀）



水戦の訓練をしたといわれる大池・向こう側の三田小学校が本丸跡

・川本幸民（1810年～1871年）

近代日本化学の礎を築いた川本幸民（かわもとかうみん）は、三田藩医川本周安（しゅうあん）の三男として生まれました。第 10 代藩主九鬼隆国（くきりゅうこく）に抜擢され、江戸の坪井信道塾でオランダ医術を学びました。特に物理化学の分野を深く研究し、「化学」という言葉を初めて使用した人物です。日本で初めてマッチの試作やビールの醸造、写真機を組み立て銀板写真の撮影を行い成功しました。明治維新で帰郷し、屋敷町にあった金心寺で英蘭塾を開き、後進の指導にあたりました。

・白洲 退蔵 生誕地 （白洲家は三田藩に代々仕えてきた儒学者の家系であった）。

白洲次郎の祖父 退蔵は 文政 12 年(1829 年)にここで生まれる。

白洲家は三田藩代々の儒官の家系であり、藩校「造士館」の教授を務めたが、三田藩最後の藩主九鬼隆義に請われ、藩政に携わり辣腕を振るった。藩財政を立て直し、明治維新の際に藩をリードして難局を乗り切った。

明治には三田県大参事（現在の副知事に相当する役職）となり、太政官札の流通に努力した。その後九鬼隆義らと共に神戸で「志摩三商会」を設立・運営に参画し、終始九鬼家のために尽くした。のち、横浜正金銀行頭取や岐阜県大書記官等歴任した。

志摩三商会は、外国の医薬品を中心に、食料品、雑貨、薬種などを販売する輸入商社である。

息子で白洲次郎の父・白洲文平もここで生まれた



・白洲次郎の父文平

現在の三田市屋敷町で生まれた。一致英和学校（現・明治学院大学）卒業後、米国のハーバード大学とドイツのボン大学に留学。帰国後、銀行や紡績会社に入ったが、人に使われるのを嫌い、綿貿易の会社「白洲商店」を興して、巨万の富を築いた。芦屋や伊丹に敷地約4万坪、美術館まである邸宅を建て、趣味の建築などに散在。昭和の恐慌で破綻した。

・心月院

本尊 釈迦牟尼仏

旧三田藩主 九鬼家の菩提寺。

位牌堂以外全て（本堂・経蔵・総門・山門・庫裡・書院・蔵など）江戸時代の建物。

本堂正面の庭が美しく、梅・桜・さつき・紅葉などが見られる。

旧三田藩歴代の墓所でもあった。

白洲次郎・正子、九鬼隆一、など多数の墓がある。

寛永10年(1633)勢州鳥羽より移封された九鬼氏が、家代々の宗廟として、旧領の菩薩寺常安寺の覚雄是和尚を開祖として建立した。境内には歴代藩主とその家族や白洲次郎・正子がひっそりと眠りにについている墓所がある。

また、山門は関ヶ原戦後、時の領主有馬豊氏が豊臣家から譲り受けた有馬温泉御殿の遺構の一部と伝える。



山 門



総 門



本堂と前庭



本堂には九鬼家の家系図が掲げてある



九鬼家の墓所



白洲 次郎（右）正子（左）の墓

白洲家は、元々は三田藩の儒者の家柄だったため、心月院に墓があるのです。

白洲次郎が昭和 **60年（1985）（83）**歳に没した時、妻の正子と子どもに残した遺言書には「葬式無用 戒名不用」と記してあったそうで、夫婦ともに、表に梵字、裏に俗名が刻まれているだけで、戒名は刻まれていないのが特徴です。白洲正子は平成 **10年（88歳）**に没した。



白洲次郎の遺言書

次郎の碑には「不動明王」、正子の碑には「十一面観音」の梵字が刻まれている。



不動明王の意味を示す梵字「カーン」



十一面観音の意味を示す梵字「キャ」

ちなみに、この墓は正子がデザインしたといわれています。



若いころの白洲正子と次郎



白洲次郎



白洲正子

・白洲次郎の生涯

父文平と母芳子の次男として、明治35年2月17日、芦屋（精道村）に生まれる。

神戸一中を卒業。大正12年、英国ケンブリッジ大学クレアカレッジに留学する。

英国流の紳士道を身に付けた。

アメリカ帰りの伯爵令嬢樺山正子と巡り合い、昭和4年に結婚する。次郎27歳。正子19歳。互いにひとめぼれであった。

占領を背負った男

終戦の昭和20年吉田茂外相に重用され、終戦連絡中央事務局参与となった。連合軍総司令部（GHQ）と英国留学中に身につけた英語をもって対等に渡り合い「従順ならざる唯一の日本人」と言われ、恐れられた。

原理原則を忠実に生きた

昭和21年日本国憲法制定作業の現場に立ち会ったのをはじめ、初代貿易庁長官に就任した。いち早く貿易立国を標榜し、通商政策と産業政策を一体化させる通商産業省を誕生させる一役を担った。

東北電力会長としても戦後の日本の復興に先鞭をつけた。昭和26年のサンフランシスコ講和会議に全権団顧問として出席、そして終始毅然とした態度を貫きとおした。

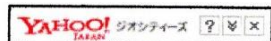
夫婦円満を貫いて

能や骨董に造詣の深い正子と次郎夫妻は、茅葺の自邸「武相荘」（現・東京都町田市）に住み、お互いに波乱に富んだ人生を駆け抜けた。

・坪井 信道

江戸後期の医者。[美濃](#)生。名は道、号は誠軒。江戸に出て赤貧の中、[宇田川玄真](#)の門下で援助を受けつつ西洋医術を修める。深川に開業したところ治療を請う者が絶えず、また学塾日習堂には多くの門弟が集まった。その学識と[篤行](#)により長州萩藩毛利家の侍医に召される。門下に[緒方洪庵](#)・杉田成郷・黒田良安らがいる。[伊東玄朴](#)・[戸塚静海](#)と並んで三大蘭方医と称された。嘉永元年(1848)歿、54才。贈正五位。

（市及び当該施設のパンフレット及びインターネット情報による）



九鬼家の系譜

[ホームへ](#)